

1.

2010年春のダイヤ改正で、今まで四往復あった特急「雷鳥」が一往復になることが決まったことを切っ掛けに、雷鳥はいよいよサンダーバードに特急のリーダーとしての役割を譲る決意をした。

サンダーバードが金沢に来てから既に十五年、サンダーバードとして独り立ちしてから数えても十三年は経過している。一日辺りの運転本数も今や雷鳥より断然多く、名実ともに北陸の看板特急になったと言えるだろう。メタル面ではまだ若干の不安は残るが、いつまで経っても甘やかしては自立は出来ない。そろそろ潮時だろうというのが、雷鳥と、そして雷鳥とサンダーバードの上司に当たる人物の意見だった。

「それで、引き継ぎはいつ頃にしますか」

椅子に座った上司の前に立ち、伺いを立てると、上司は手に持っていた厚いスケジュール帳をべらべらと捲り始めた。

「そうですね……しばらくはまだダイヤ改正で慌ただし

くなりますし、一月ほどすればゴールデンウィークが控えている。それを考慮すると、五月半ばくらいでどうでしょうか、雷鳥さん」

雷鳥が運転を始めてから既に四十六年が経った。一度特急になれば、名称が廃止になるか車両が変わるかしない限り走り続ける事を定められている雷鳥たちとは違って、駅で働く人は数年単位で担当が変わる。特に管理職と言われる上層部の入れ替わりは激しく、何度上司が替わったか覚えていない位だ。そして、今の上司に当たる人は、雷鳥よりも年下だった。

そしてこの上司は雷鳥に対して敬語を使う。上司のだから止めるようにと何度も進言したのだが、結局今でも直っていない。

「わしはそれで構いません」

雷鳥の返事に頷いて、日付はこちらで調整します、とその人が言った。

「しかし、分かっていたこととは言え、あなたがいなくなるのは寂しいものです」

予定していた話を終え、執務室を出ようとした雷鳥の背中、そんな言葉が掛けられた。しかし雷鳥は首を横に振り、

「老兵は去るのみですよ。もうわしの時代じゃない。そ

れに、わしは他の仲間と比べても十分なくらい走らせてもらいましたから」

「……そうですね。それでは、残り一年、宜しく願います」

「分かりました」

出口で一礼して、執務室を後にする。廊下に出て一人きりになった雷鳥は、そつと溜息を吐いた。

今日の打ち合わせの議題は二つ。ダイヤ改正の話と、引き継ぎの話だ。

雷鳥の引退の話は前々から話題に上っていたが、今回のダイヤ改正を機にようやく上層部も重い腰を上げたらしい。正直、一往復だけ残されると聞いたときには、何の気まぐれでと思ったが、一往復を残してその列車でキャンペーンを行うつもりだと聞いて納得した。複数列車が走っていれば、その分準備も必要だし人員も割かねばならないが、一往復ならその列車に合わせるだけでいい。しかも、残ることになった車両のスジは、混雑しそうにない中途半端な時間帯だった。

まあ、急に明日から走らなくても良いよと言われるよりは良いと思いき直す事にした。キャンペーンをやってもらえるなら有り難い話だ。そういつたイベントも一切無く、廃止になった特急達も数多くいる。彼等の事を思え

ば、恵まれすぎているくらいだ。

それに、まずは一年後の引退ではなく、数ヶ月後に予定しているサンダーバードへの引き継ぎを無事に終わらせねばならない。

サンダーバードは単なる「雷鳥の後継者」ではない。

もう一つ引き継いでもらわねばならないものがある。それが「北陸地区のリーダー」という役職だ。

JRに分社化された今でも、おおよそ支社毎に「地区のリーダー」が定められていた。それは国鉄時代からの風習で、地区のリーダーは、その地区においても最も本数が多い列車が受け持つことになっているらしい。らしいというのは、雷鳥が北陸地区の初代リーダーであり、今まで一度も代替わりしていないため、どのような決まりになっているかはつきり分かっていない、というのが本当のところだった。各地区も似たような物で、古くから走っている重鎮が務めている所が多い。

雷鳥がデビューする前に北陸本線を走っていた特急はごく僅かで、まとめ役を置くような規模でもなかった。北陸だけでなく、何処の地区も似たようなものだった。

それが、雷鳥としらさぎが電車特急として走り始め、続いてはくたか、北越、白山……と徐々に特急が増えていった時に、まとめ役を置く必要があるだろうと判断した

上層部が、雷鳥に指示したのだ。「運転本数が一番多いお前が北陸地区のリーダーになれ」と。

それから四十年以上が経過し、サンダーバードが来てからは本数も減る一方だというのに、上は頑なに雷鳥をリーダーの座からおろそうとはしなかった。それが、この春のダイヤ改正で一往復になる事を契機に、ようやく上も重い腰を上げたというわけだ。

「あいつに務まるのかねえ……」

口の中で呟きながら思い浮かべるのは、サンダーバードの顔だ。関西と北陸を結ぶ「雷鳥」の後継者でありながら、それとは違う名前を冠する特急。

自分と違った名前を持つ特急が自分の後継者になることを認められないと思っていた時期もあった。それに、サンダーバードも金沢に来たばかりの時は酷いものだった。勝手に仕事を抜け出すわ、文句だけは一人前、仕事は半人前どころか三分の一にも満たない有様。こいつを無事に後継者として育てられるのかと悩んだこともあるが、十五年が経過して、サンダーバードは雷鳥の期待をいい意味で裏切り、今では特急の一人として立派に成長した。

そんなことを考えながら、雷鳥はサンダーバードを探して休憩室へと向かっていた。今日は天気良く、廊下

の窓から差し込む光のお陰で室内も大分暖かくなっている。本格的な春はまだ先だが、早くこの暖かさが当たり前の気候になって欲しいものだと思う。

程なくして休憩室の前に辿り着いた雷鳥は、足を止め、深呼吸をした。そして、部屋のドアに手を掛けた途端、中から大きな笑い声が聞こえてきた。聞き慣れたその声に、がっかりしながら勢いよくドアを開ける。

「サンダーバードはいるか？」

敢えて大きな声で名前を呼ぶ。もちろん中にサンダーバードがいることを分かっていた上での行動だ。

「げっ、おやつさん！」

雷鳥の姿を見るなり、笑い声の主が驚いた顔をした。そんなサンダーバードに、雷鳥はわざと顔に笑みを浮かべて近づいていく。

「どうした、わしが来たらまずいことでもあるのか」

「い、いや別に無いけどいきなり来るからビックリした」隣にはしらさがいて、お疲れ様です、とにこやかに挨拶をしてくる。サンダーバードとは正反対で、どんな時でも動じない、見た目以上に腹が据わっている男だ。こいつが自分の後継者だったら良かったのにと何度思ったか知れない。

しかし雷鳥の後継者は、今自分の目の前にいる、いつ

まで経っても落ち着きのないサンダーバードなのだつた。

「サンダーバード、ちよつとこつちに來い」

「え、いや、オレ何もしてないよ？」

「お前がわしに呼ばれるのは何かしたときだけなのか？ん？」

それでもなお渋るサンダーバードに、良いから來い、と言つて無理矢理部屋から引つ張り出すと、空いていた会議室に入った。

日当たりの悪い会議室の空気は冷たかつた。サンダーバードが寒いと悲鳴を上げながらエアコンのスイッチを入れる。

そう言えばこうして二人きりで話をするのは久しぶりかも知れない。昔、サンダーバードがやつて來た頃はこうしてマンツーマンで物事を教え込んだものだつたが、それも数年のうちに無くなつていた。そう、サンダーバードに「はくたか」という同期が出來てからだ。

「何だよおやつさん」

まあ座れ、と近くにあつたパイプ椅子を勧め、自分も一つを近くに引き寄せて腰掛けた。サンダーバードは居心地悪そうにしながらも、雷鳥の向かいに腰を下ろす。「いいか、良く聞け。次のダイヤ改正だが、わしは往復

一本になる事が決まつた。今走っている『雷鳥』四往復のうち、三往復は『サンダーバード』になる」

「え……」

「わしが何を言いたいか分かるか？サンダーバード」

さすがのサンダーバードも、雷鳥の口から告げられた言葉に言葉を失つた。いつかこの日が來ることを、頭の片隅には置いていたはずだ。彼が金沢に來た時から、ゆくゆくは、という話があつたのだから。

「……そこで、お前に、北陸本線の特急達のリーダーを任せたい」

「オレに？」

「お前しかいない。お前が北陸の新しいリーダーだ、サンダーバード」

「……オレに出來るかな」

サンダーバードの声が、弱々しく聞こえた。膝の上に置かれた手がぎゅつと握りしめられる。しかし雷鳥は慰めることはせず、堅い口調で言葉を続ける。

「出來る出來ないの問題ではない。実際に一番運転本数が多く、一番知名度もあるのはお前だろう。誰かがやらなければならぬ仕事だ」

そう言いながら、實際はサンダーバードではなく、自分に言い聞かせていた。だから、サンダーバードにリー

ダーを譲るのだと、自分を納得させるためだった。まだ幼い、落ち着きがないと思いついてきたサンダーバードが、十五年経って立派な青年に成長した事を認めなければならぬ時期に来ている。

いや、内心はもう後継者として十分だと思っていた。だが、十五年の間、サンダーバードに対して怒ってばかりだったこともあって、改めてそれを口に出ることが出来なかつただけだ。

サンダーバードに自分の本心を伝えることが出来るのは、残り一年。今、自分の気持ちを誤魔化しているようでは、今後伝える機会はやって来ないかもしれない。そう思った雷鳥は、椅子から立ち上がる、黙つたまま唇を噛むサンダーバードの肩を優しく叩いた。

「おやつさん？」

「大丈夫だ、サンダーバード。お前はもう、ずっと前から一人前の特急だ。お前なら出来る。それに、お前には、はくたかもしらさぎもいる。北越ももうしばらくは残る。困ったときは迷うことなく相談すればいい。わしが、先代のしらさぎに助けられてきたようにな。リーダーは一入じゃ務まらない」

「おやつさんは、どうなるんだ？」

「わしか？ わしは来年のダイヤ改正で引退だ。しらさぎ

や、白山や、その他多くの特急達と同じように、ここを去るのみだ」

複雑な表情のサンダーバードの髪をくしゃつと撫でて、辺りに漂う湿った空気を追い出すかのように、わざと明るく言った。

「もう十分長く走つたよ。お前が気にする事じゃない。遅かれ早かれ、いつか引退する日が来るのは誰だって同じだ」

「うん……」

「具体的な引き継ぎはまだ先だ。多分ゴールデンウィークが終わって落ち着いた頃になるな。まあ、引き継ぎについて言つたつて大したことはない。ちよびつとだけ仕事が増えるだけだ」

話はこれで終わりだ、戻つて良いぞ、と言うと、俯いたままだったサンダーバードは顔を上げ、雷鳥を見た。僅かに涙が浮かんでいるように見えたが、雷鳥は敢えてそれには気付かない振りをした。引退の事を考えて涙を流すには、まだ早いと思つたからだ。

サンダーバードは椅子から立ち上がると踵を返し、出口の方へ向かつて数歩歩いた。が、すぐに足を止める。「ほら、どうした。早く行け」

背中に向かつてそう急かしたのは、むしろこちらの涙

腺が緩むところを見られたくなかったからだ。が、サンダーバードは背中を向けたまま、

「……おやつさん」

そう、雷鳥を呼んだ。その呼び方は十五年前にサンダーバードが言い出したものだったと、今更ながらに思い出す。

その声はやはり震えているようで、ますます雷鳥の胸を締め付ける。その気持ちを隠すため、雷鳥は茶化すように盛大に肩を竦めて、

「何だ、気持ち悪いな。もつと喜んだらどうだ。口うるさい爺が居なくなるつてな」

「そんなことない！」

振り向きそうになるサンダーバードを「冗談だ」という言葉で制す。

「さ、行け。あと、引退の事は他のみんなにはまだ内緒だぞ。数日後にダイや改正の内容が発表されれば、嫌でも分かることだからな」

雷鳥の言葉にサンダーバードは僅かに頷いて、そして部屋を出て行った。ぱたん、と扉が閉まる音と共に、張り詰めていた気持ちも緩む。同時に鼻の奥がツンとして、臉の上にはじわりと水が滲み出す。

「つたく、まだ泣くには早いつてんだよ」

自分自身に悪態を吐きながら、その水を乱暴に手の甲で拭った。拭かれたそれはあつさり乾き、僅かな皮膚の突っ張りだけを残して消えていった。

慌ただしいゴールデンウィークが終わり、ダイヤも通常に戻ってやれやれと一息吐く頃、正式にリーダーの交代について上から指示があった。

事前に聞かされていたサンダーバードはもちろんだが、初めて聞くはずのしらさぎやはくたか、その他の特急達についても特に大騒ぎするような人はいなかった。ダイや改正があつてから、誰もが近いうちにそうなるだろうと予想していたのかもしれない。

盛大にするつもりはないという雷鳥の意志が尊重され、引き継ぎの挨拶は日中の一時間ほど、金沢支社内で一番大きな会議室で行う事になった。その提案も最初は渋つたのだが、上は当初ホテルの大広間で宴会も兼ねてやるのだの、とにかく雷鳥が思いもしなかった事を考えていたようで、これが譲歩できるギリギリのラインだとごねら

れたのだ。

北陸地区のリーダーを引き継ぐという意味もあってか、上はなるべく多くの人が参加できる日程をた探っていたらしい。雷鳥が渋々ながら頷くと、後はぼたぼたと日程から何から全てが決まっていた。現リーダーの雷鳥も次期リーダーのサンダーバードもまるで蚊帳の外だ。

しかし、上層部が尽力した結果、当日は昼間特急全員と、普通列車、そして他社所属ではあるが夜行列車の日本海が参加してくれる事になった。トワイライトと能登は都合が合わず参加は難しいと事前に連絡があり、またサンダーバードがリーダーになる事については全面的に支持するという旨の連絡を寄越していた。

そして当日。会場となった第一会議室に職員や列車達がぞろぞろと集まってくる。予定の時間の五分前には用意されていた席の殆どが埋まっていた。普通の人ならばかなり緊張するであろうシチュエーションだが、本日の主役である雷鳥は全く緊張した様子もなく、逆にあくびをかみ殺す姿まで見える余裕ぶりだ。

もう一人の主役であるサンダーバードはさすがに緊張しているのか、顔が強張っていた。途中でしらさぎとはくたかがやってきて、頑張つてと肩を叩いて行ったものの、そう簡単に緊張が解れるものではない。ぎくしゃく

不自然な動きをしているサンダーバードを見て、吹き出すなという方が無理だと雷鳥は思った。

「へへっ、なんだお前その歩き方」

「わ、笑ってんじやねえよ……オレだつて緊張するよ！こんなに大勢集まるなんて聞いてないし……ほら、何か偉そうな人も座ってるし……」

「いや、悪い悪い。お前がそんなに緊張するとはなあ……来たばつかりの頃はあんなに大暴れしてたのにな」

「……もう忘れてくれよ、昔のことはさ……」

過去の汚点だと言わんばかりの表情で、サンダーバードは顔をしかめた。

金沢に来たばかりの頃のサンダーバードは、正直言つて荒れていた。まあ、いい年した特急ばかりの中に、一人新人として放り込まれたのだ、内心不安だったのを強がつて見せることで隠していたのだろうと今なら分かる。

それでもあの時は何がそんなに気に入らないのか分からず、サンダーバードの教育について散々頭を悩ませたものだ。ちゃんと指導しているのかと上司に呼び出されたことだつて数え切れないくらいあった。

「あの時の苦勞をそう簡単に忘れられるかよ。ずっと覚えてるさ。お前ほど手の掛かる後輩を持ったことは無かつたからなあ」